＜学部と附属幼稚園の共同研究＞

幼稚園教育コース第一期生の授業・実習評価の傾向及び個別ケースの分析

井口 均[*1]　元田美智子[*2]　松野絵里[*2]　枦山ゆずる[*3]
修行祐子[*2]　梅林道子[*2]　高木留美子[*2]
[*1]教育学部　[*2]附属諭稚園　[*3]平成23年4月1日より、長崎県内の公立小学校へ転出

1　問題

教員養成は勿論のこと，学士教育においても，卒業時での専門知識や実践的力の習得レベルを問題視する傾向が，中央教育審議会や文科省等を中心に強められつつある。例えば，2008年12月24日に出された中央教育審議会の答申「学士課程教育の構築に向けて」などでは，学部卒業時に「何がどこまでできるか」を明確にすべきだと問いかけ，グローバル化を視野に入れた職業人としての基礎力養成への諸課題を求めている(1)。教員養成では，学校種別に教育現場で実際に求められる実践力をより確かなものにするため，新規科目を卒業年次に導入することが決まっている。移行措置を含めて，2011年度から，4年次の必修科目となった「教職実践演習」がまさにその科目である。また，ディプロマポリシーをはじめ，カリキュラムポリシー等も各学部の課程・専攻ごとに整理し，開講科目が具体的にどのような知識と技能を学生に習得させようとしているかを明確にさせ，教育課程の見直しを図る作業も進められている。

幼稚園教育コースの2専攻は，共に主免幼稚園教諭1種免許状と保育士資格の取得を卒業要件（2010年度入学者から，保育士資格は選択に変更）としている。共に幼稚園教員養成が目的であり，専門性と実践力を兼ね備えた保育者養成を目指した。また従来の幼稚園教員養成で欠けていた芸術的技能の育成強化という点での独自性を出そうとした。後者については，入学段階で技能に優れた学生を選抜すると共に，芸術表現講座の全教員がゼミやコース運営に参画し，2専攻に共通する芸術的技能育成科目を設定することにより，幼稚園教育コース所属学生における芸術的技能のレベルアップ，とりわけ採用試験で必ず課せられるピアノ技能の向上等を図ることが期待されている。こうした点がどのように現時点で達成されているかについても検討する必要がある。

現在の幼稚園教育コースの卒業要件となる最低修得単位数は124単位で，幼稚園教諭1種免許状が取得できる。保育士資格に関しては，2010年度以降の入学者は自由選択となっており，学部で開講している保育士関連科目31単位を取得することで可能となる。附属幼稚園での教育実習も再び4週間に戻された。他の免許として，小学校教諭1種（又は2種）免許状，あるいは音楽か美術の中学校教諭1種（又は2種）免許状があり，本人の努力次第で取得可能となっている。

以上のことを念頭に，本稿では幼稚園教育コース入学第一期生（30人）を対象に，主に乳幼児教育に関する専門知識と実践力が学生にどの程度習得されているかを検討する。その際，専門知識については乳幼児教育・保育に関する専門科目の評価，実践力については附属幼稚園実習及び独自に実施した実習資質確認リストの評価を用いて行う。いずれも3年次後期までの成績である。また、学生間での比較も行う。1つは、本学部幼稚園教育コースの2つの専攻（こども保育専攻，芸術的感性開発専攻）間の比較である。2つの専攻は入学選抜が全く異なっており，専門的知識や実践力の習得レベルに違いはないかを検討する。もう1つは，本コースが用いている3種類の選抜方法(AO入試，推薦入試，前期試験入試）入学してきた学生間での比較である。専攻や選抜方法が異なる学生に応じた指導などについて，今後の課題を探る必要がある。

はじめに，本コースが設置されるまでの経緯を簡単にまとめておきたい。

（1）学部再編と幼児教育者養成部門の設置から再設置まで

①1974（昭和49）年4月，幼稚園教員養成課程（学生定員30人）が発足

配置換えを含む3人体制（幼児心理，幼児教育，保育内容）で出発したが，1980（昭和55）年に新規に1人の教員を採用し専任体制を一部整備した。幼児教育者養成部門としては本来の専任体制でスタートしたわけではなかった[(2)]。そのため，発足当時から必修科目の取り扱いに問題があったり，幼稚園教諭免許の必修科目を誰が担当するか巡って様々な議論が繰り返されたりしていた。実際，幼稚園教諭1種免許状（当時は1級免許状）の取得に必要な保育内容（当時，六領域）を必修化する方針が，学部で固まったのは1984（昭和59）年となっている。それまでは小学校教諭免許状の「付録」として幼稚園教諭免許状が取得できる状況，つまり小学校教科による幼稚園教諭免許必修科目の読み替えが数多く見られたのである。

②1998（平成10）年4月，情報文化教育課程が新設され選修へ

国立大学教育学部卒業生の教員免許取得者5千人削減策が文科省によって進められ，生き残り戦略として，1998年4月に本学部にもいわゆるゼロ免課程である情報文化教育課程が設置された。それに伴う学部改組で幼稚園教員養成課程は小学校教員養成課程と統合され，名称変更した初等教育コースに組み込まれた。これ以降，初等教育コースの中の一選修（他に教科別の選修がある）として，幼児教育選修（幼児教育ゼミ，幼児心理ゼミ，保育内容ゼミ）が残り，幼稚園教諭1種免許状取得を引き継いだ。選修選択は2年次後期になってからであり，幼児教育選修所属が決定した時点で，小学校教諭1種免許状と幼稚園教諭1種免許状の取得が卒業要件になる仕組みであった。カリキュラム内容は，幼稚園教員養成課程時代とほぼ同様で，名目上は小学校教諭1種免許状が主免で幼稚園教諭1種免許状は副免という扱いであったが，実際は両免許状とも主免扱いであった。そのため，附属幼稚園での教育実習期間は小学校と同じく4週間で実施された。

③2004（平成16）年4月，選修からゼミ単位へ

2004年4月からコア・カリキュラムが実施されることになり，各コースの主免を中心に教育実習及び実践力重視の傾向が選修制度やカリキュラムに反映するかたちとなっ

た。初等教育と中学校教科教育を一体化して教科や専門分野ごとで括るピーク制選修制度から，学生の所属を小学校と中学校とをまず区分し，学生はそれぞれの学校種別及び教科別のゼミ単位で分けられることになった。初等教育コース内では，幼稚園教諭1種免許状が実質的に副免扱いとなり，幼児教育関係のゼミは選修としての括りを失った。附属幼稚園での教育実習も2週間に短縮された。3つのゼミにバラバラにされて存続できたものの，幼児教育の看板がなくなり，初等教育コース内ではマイナー的存在になったと言える。この時期，ゼミ所属学生数は，計15人前後で推移した。2007（平成19）年3月末には，幼児教育ゼミ担当教員が他大学へ転出したが，後任人事はなされなかった。その後，専任教員2名体制で，同一講座の学部教員をはじめ，附属幼稚園教員や非常勤講師に支えられながら幼児教育者養成部門を維持してきた。しかし，残る2名の内，もう一人の専任教員も2008年3月末で定年退職となり，未だに後任補充がなされていない。定年退職教員のゼミ募集は退職年度の2年前から募集を中止するため，2007年度以降，幼児教育関連ゼミは1つだけとなった。

④2008（平成20）年4月，学生定員30人で指定保育士養成施設となる幼稚園教育コース発足

本学部はゼロ免課程を見直し，教員養成課程との統合によって，教員養成に特化することを決定した。1998（平成10）年4月に設置された情報文化教育課程（学生定員60人）は，2008年度からの入学者募集を止めた。その当時，既に少子化対策が重点政策として掲げられて保育需要が高まる一方で，地元保育界からの国立大学教育学部での保育士養成要求も示され，受験生の資格志向が強まっていたことなどを背景に，2007年1月初め，当時の学部長より，2008年4月より指定保育士養成施設の受け皿を兼ねた幼稚園教育コースの新設が指示された。コースは，独自性を出すための芸術的技能（主に音楽，美術分野）を重視した「芸術的感性開発専攻」（OA入試と推薦入試による10人+α，芸術表現講座の教員約10人がゼミ担当）と，「こども保育専攻」（推薦入試と前期試験による15名+α，人間発達講座の2名がゼミ担当）の2専攻で構成されることになった。「こども保育専攻」を担当する教員として当初見込んでいた2人の新規採用予定数の内，実際に新規採用できたのは1人のみであったが，2007年10月までに採用人事と九州厚生局での書類審査を無事通過した。延期されていた九州厚生局による施設立入り調査も2008年3月中旬に無事終了し，発足年度の直前に指定保育士養成施設として認可されたのである。こうして，幼稚園教育コースは「船出」し，今年4年目で第一期生の卒業を迎えた。

以上の経緯を踏まえ，本稿では幼稚園教育コース生を対象に，主に幼児教育に関する専門知識と実践力が学生にどの程度習得されているかを検討する。

（2）授業成績及び附属幼稚園における教育実習関係科目の評価に関する追跡調査方法

本調査を実施したのは，幼稚園教育コースが発足して3年が経過した時点である。調査結果の公表は，今回の調査対象学生との了解事項及び投稿時期締切日との関係で，1年遅れの卒業年次末となった。3年時後期終了時で，全学教育科目を履修し終え，幼稚

園教諭 1 種免許状及び保育士資格に関する必修科目のほとんどが履修済となっている。必修実習も，既に附属幼稚園実習と保育所実習を終え，2011 年度前期に予定されている施設実習を残すのみであった。

①調査対象学生

調査対象学生は，第一期生として入学した 2008 年度（平成 20）入学者である。本来ならば 30 人であるが，推薦入試で入学した学生 1 人が休学中であったため，29 人となった。

また、学生間での比較も行う。1 つは、本学部幼稚園教育コースの 2 つの専攻（こども保育専攻，芸術的感性開発専攻）間の比較である。2 つの専攻は入学選抜が全く異なっており，専門的知識や実践力の習得レベルに違いはないかを検討する。もう 1 つは，本コースが用いている 3 種類の選抜方法（AO 入試，推薦入試，前期試験入試）入学してきた学生間での比較である。専攻や選抜方法が異なる学生に応じた指導などについて，今後の課題を探る必要がある。

②分析した授業成績

授業成績については，ピアノ技能（伴奏），3 年後期までの全履修科目（以下，全科目），幼稚園教諭 1 種免許状必修科目（附幼実習事前・事後指導と附幼実習は除く，以下，幼教科目），附幼実習事前・事後指導（以下，事前・事後），附幼実習（以下，実習）について検討した。

用いた評価点は，第 1 は保育者によるピアノ技能（伴奏）の実践的評価点，第 2 は 3 年次後期までの各授業成績が数値化された GPA（グレート・ポイント・アベレージ）得点，第 3 は実習直後に実施した実習による資質評価項目に対する学生の自己評価点と実習担任による評価点である。

学生間比較については，既に述べた通り，専攻別の比較，選抜方法別の比較である。その上で，第 2 でみた評価の変動パターンを検討し，特に実習評価が低い個別のケース（＝実践力に問題）を抽出し，実習による資質評価項目の自己評価と実習担任評価から，具体的指導課題を検討する。

③用いた授業成績データ

学務で集計記録された成績データを用いた [3]。2008 年入学幼稚園成績免許必修 0310 データ，2008 年入学幼稚園成績 0310 データ，幼稚園免許必修のみクロス集計の 3 種のデータが整理されている。なお成績データの活用に際して，当該学生に目的等を説明した上で，実名を伏せて授業データを使用することへの事前承諾を得た。個人ごとの授業評価点は，教育学部規定第 13 条の 3 にある GPA 計算式を使用した [4]。

④実習による資質評価項目に対する自己評価と実習担任による客観的評価

実習評価の項目として，幼稚園教員の資質向上に関する「調査研究協力者会議報告書 [5]」で示された，幼稚園教員に求められる専門性の中の 3 項目を用いた。第 1 は幼稚園教員としての基本的資質に関することであり，幼児一人ひとりの内面的理解力と活動場面に応じて適切にかかわる力である。この点を，子どもとのコミュニケーション力，子どもの興味・関心への理解力，そして子どもへの直接的援助で評価した。第 2 は具体的

に保育を構想する力として，ねらい・内容設定力であり，指導案作成力である。この点については，指導案でのねらい・内容の設定力と指導展開案作成力で評価した。実習の段階でどのレベルまでを求めるかは難しい。だが，少なくとも自分なりのつもりや意図をもち，具体的に生活や自然環境における子どもの体験活動を構想し，実践として取組めたかどうかである。第３は教員集団の一員としての協働性の力である。教員集団の一員として協働関係を構築して，園全体として教育活動を展開していく力である。これについては，教生同士との協力と担任からのアドバイス対応で評価した。いずれも，問題となる実践力の中核的項目と考えたからである。

それ以外に，実習場面において観察可能な３項目を追加し，表１に示した 10 項目で構成した。各項目については，2ー5 つの具体的質問事項が設定されており，それぞれについて得点した５段階評価の平均点を各項目の評価点として用いた。５段階は，非常に良い（5），かなりよい（4），よい（3），ふつう（2），不十分（1）であった。学生には，同一の項目について実習担任が評価することを伝えずに実施した。５名による実習担任の評価は評価基準がそれぞれで異なる可能性はあったが，実習指導での共通認識が形成されていることを考慮し，各自の素点をそのまま用いた。

＊挨拶や時間厳守などの勤務態度	＊読み聞かせやピアノ伴奏といった基礎的技能力
・教育実習生同士との協力関係	・担任からのアドバイスへの対応・学習力
・子どもとのコミュニケーション関係力	・指導案づくりでのねらい・内容の設定力
・子どもの安全面や興味・関心への理解力	・指導展開案作成力
・子どもへの必要場面での具体的介入や援助力	＊保育に対する使命感・責任感

表１　実習による資質評価項目（＊追加項目）

2　ピアノ技能（伴奏）評価の全体平均及び選抜方法（専攻）別比較

実習による資質評価項目にある「保育で必要となる歌などのピアノ演奏（伴奏）ができる」について，実習担任評価の５段階評価を用いた。全体平均点は 2.9 であった。選抜別グループ平均点でみた場合，AO 入試グループが 3.6 で最も高く，２番目に前期入試グループが 2.7，最も低かったのは推薦入試グループで 1.8 であった。芸術的技能（とりわけピアノ技能）のレベルアップは，少なくとも AO 入試グループ，つまり芸術的感性開発専攻生ではそれなりに達成されていると思われる。評価点１が前期入試グループには 15 人中３人，推薦入試グループには４人中２人いる。両グループとも「こども保育専攻」生であり，その内，約４人に１人が評価１ということで，コース全体で見れば、音楽的基礎技能向上の成果に関する限り，今後の検討課題となろう。

3　選抜方法別に授業評価 GPA 得点の比較

個人別総合評価点（＝GPA 得点）の算出は，本学部が採用している計算式（評価 AA の単位数×４＋評価Ａの単位数×３＋評価Ｂの単位数×２＋評価Ｃの単位数×１／全履修単位数）を用いた。ただし，その比較に際しては，若干問題があることは否定できない。その問題とは GPA 得点評価の客観性についてである。評価の共準性や厳密性，また授業に対する教員の基本的姿勢も様々であり，これらの条件を統一しないままの数値となっている。その意味では，授業担当教員の主観的判断が作用している面があるが，同じ授業を受講しての評価結果を比較したものであり，大まかな比較が可能な数値であることをまず指摘しておきたい。

（1）入試選抜グループ別にみた GPA 平均得点の比較

図１は，AO 入試グループ（10 人：芸術的感性開発専攻生），推薦入試グループ（４人：こども保育専攻生），前期入試グループ（15 人：こども保育専攻生）の３種の選抜方法別に，３年次後期までに履修した全科目，幼教科目，事前・事後科目，実習の各 GPA 得点を示したものである。全科目は，卒業要件である全学教育科目，幼稚園教諭１種免許状必修科目，保育士資格必修科目を共通科目に，各自の判断で履修する小学校教免許や中学校教免許に関する選択科目を含んでいる。取得単位数で見ると 105 単位から 143 単位までの幅がある。幼教科目については，免許法上に定められ，３年次までに取得可能な科目から実習関連科目を除いた 60 単位を基本にしている。事前・事後科目は計２単位，附幼実習は４単位である。

GPA 平均得点に示される傾向として，前期入試グループの場合，各科目の GPA 平均得点の変動が小さい。全科目 3.0，幼教科目 2.8，事前・事後科目 2.7，実習 2.8 となっている。AO 入試グループの場合，全科目と幼教科目は前期入試グループとほぼ同じ傾向を示すが，事前・事後 2.3 と実習 2.4 と両方で低下する。

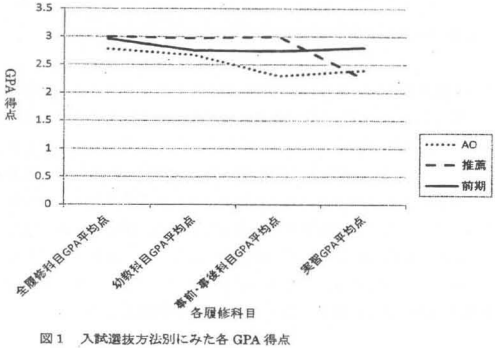

図１　入試選抜方法別にみた各 GPA 得点

推薦入試グループは全科目，幼教科目，事前・事後科目が共に 3.0 で同レベルだが，実習のみ 2.3 と急落する。実習を除けば授業科目の成績で最も安定的かつ高得点を得たのは推薦入試グループである。

各グループの人数が少ないだけに，今回示された傾向がどこまで一般化できるかは疑問だが，以下の点については今後検討する必要があろう。大学入試センター試験を課すことは教科学習力のみでなく，事前・事後や実習での評価を一定水準で維持する上で必要であろうということ。また AO 入試が重視している自己表現力は，幼児教育での事前・事後や実習評価に必ずしも結びついていないということ。さらに推薦入試は専門教科等での高成績を示すが，実習評価との落差が大きいケースがあるといった点である。

（2）入試選抜グループ別にみた学生個人の GPA 得点

図２は入試選抜グループ別に学生一人ひとりについて GPA 得点を示したものである。点線は AO 入試(A)，破線は推薦入試(S)，実線は前期入試(Z)の学生を示している。全科目 GPA 得点と幼教科目 GPA 得点の相関は，r＝0.793 で高い正の相関を示し，幼教科目 GPA 得点と事前・事後 GPA 得点の相関は，r＝0.590 で同様に正の相関ありとなった。さらに幼教科目 GPA 得点と実習 GPA 得点の相関は，r＝0.473 で同じく正の相関ありとなった。入試グループ別に，幼教科目，事前・事後，実習の得点パタンを見た。

①「前期入試グループについて

評価 A と評価 B が半々の割合と考えられる 2.5 を基準に，各学生の幼教科目，事前・事後，実習の３科目全てで 2.5 以上を得ているのは，図２の中の Z1, Z3, Z4, Z6, Z10, Z12, Z13, Z14, Z15 の９人で約６割を占めている。１科目のみ 2.5 以下であったのは Z2, Z5, Z7, Z8, Z11 の５人である。事前・事後が２人，実習が２人，幼教科目が１人となっている。Z9 のみ２科目で 2.5 以下の得点となっており，事前・事後と実習である。基本的に，比較的安定した成績を各科目で取得している学生が多数を占めている。ただし，GPA 得点が１科目または２科目で 2.5 以下のケースについて，どのような問題があるかを検討する必要がある。

②AO 入試グループについて

AO 入試グループの場合，幼教科目，事前・事後科目，実習の３科目全てで 2.5 以上を得ているのは，A2, A5, A7, A8, A10 の５人で半数を占めている。１科目のみ 2.5 以下の学生はいないが，２科目で 2.5 以下の得点の学生が A1 と A9 の２人で，科目は事前・事後と実習である。３科目全てで 2.5 以下の得点をとった学生が A3, A4, A6 の３人と多い。基本的に成績が２極化している。GPA 得点が２科目または３科目全てで 2.5 以下のケースについて，どのような問題があるかを検討する必要がある

③推薦入試グループについて

推薦入試グループで幼教科目，事前・事後，実習の３科目全てで 2.5 以上を得ているのは，S2 の１名のみである。１科目のみ 2.5 以下であったのは残り３人の S1, S4, S5 で，科目は共通して実習となっている。実習の実際の評価は B であり，これらの学生についても，どのような問題があるかを検討する必要がある。

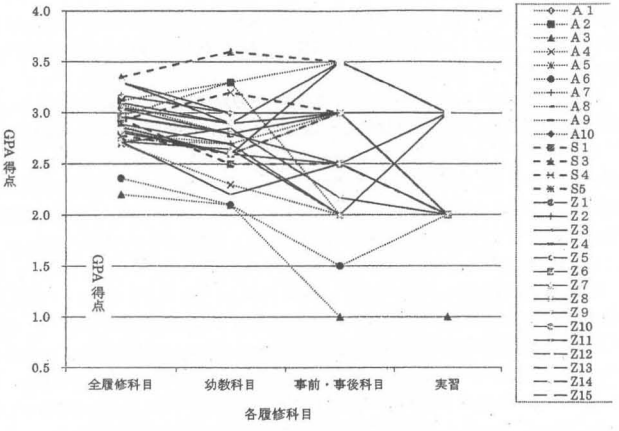

図2　入試選抜グループ別にみた学生個人の GPA 得点

4　附幼実習における実習評価（自己評価及び実習担任評価）の検討

2010年9月に実施した附属幼稚園での20間の実習終了後，同一の実習評価項目について，学生による自己評価と実習指導を担当したクラス担任による学生評価を実施した。評価は、既に示した5段階である。

（1）自己評価の傾向

図3は10項目についての自己評価点について，全体平均点と入試選抜グループ別の平均点を示したものである。各入試選抜グループ間に類似した傾向が見られる。挨拶や時間厳守などの勤務態度，教育実習生同士との協力関係，担任からのアドバイスへの対応・学習力，保育に対する使命感・責任感の4項目で高得点を示す傾向である。前期入試グループは全体平均の項目間変動パタンに最も類似したパタンとなっている。A0入試グループも同様の傾向をもつが，前期入試グループとは逆に，教育実習生同士との協力関係で全体平均点より低く，子どもの安全や興味・関心への理解力，子どもへの具体的介入や援助力，読み聞かせやピアノ伴奏といった基礎的技能力の3項目で全体平均点より多少高くなるパタンを示している。推薦入試グループは8項目で全体の平均点を上回っており，自己評価としては3グループ中で最も高くなっている。

（2）実習担任評価の傾向

図4は自己評価で用いた項目と同じ10項目について，実習担任が各学生について評価した全体平均点と入試選抜グループ別の平均点を示したものである。全体平均点を自

己評価平均点と比較した場合，大きな違いは，評価点の上下動の幅が小さくなっていることである。また，パタンとして教育実習生同士との協力関係，担任からのアドバイスへの対応・学習力，保育に対する使命感・責任感の３項目が高くなり，点数で見ると，挨拶や時間厳守などの勤務態度，担任からのアドバイスへの」対応・学習力では実習担

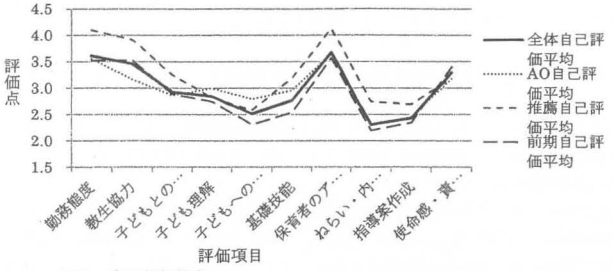

図３　自己評価得点

任評価点が学生の自己評価点より低くなる点でも違いが見られる。その一方で，指導案づくりでのねらい・内容の設定力，指導案作成力の２項目での実習担任評価点は学生の自己評価点より高くなる傾向を示している。実習担任教員は，学生の日常の仕事ぶりや学ぶ姿勢に対してはより厳しい目を向けているが，指導案づくりなどには，学生の頑張

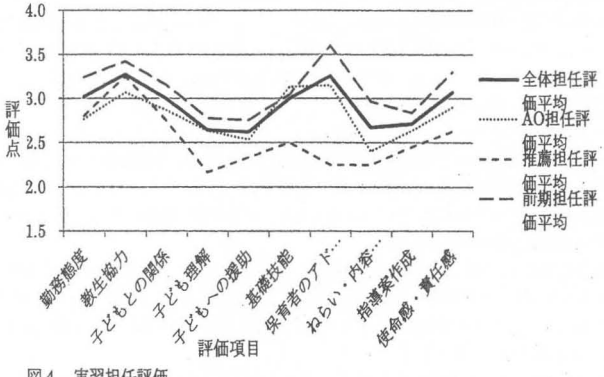

図４　実習担任評価

りを含めて積極的に評価してくれ、結果的に評価点が高くなっているのではなかろうか。

入試選抜グループ別にみた場合，実習担任評価点において，前期入試グループが 10

項目全てで全体の平均点を上回っており，実習担任の評価は３グループ中で最も高い。AO 入試グループは，実習担任評価点において，読み聞かせやピアノ伴奏といった基礎的技能力以外の９項目で全体の平均点を下回っている。推薦入試グループは，自己評価の場合と全く逆の結果で，教育実習生同士との協力関係を除く９項目において３つのグループ中で最も低くなっている。推薦入試グループの評価の低さは想定外であった。恐らく個別のケースが大きく関与していると推測できる。

5　個別の問題ケースに関する実習評価内容からの検討

入試選抜別グループ別に，問題ケースとして挙げられた学生について，自己評価得点と実習担任評価点及び実習担任の実習コメントから，今後の課題を考える。

（1）前期入試グループのケース分析

このグループでとりあげるのは，事前・事後のみ GPA 得点が 2.5 未満の Z2(2.0)と Z7(2.0)の２人，実習のみ 2.5 未満の Z5(2.0)と Z8(2.0)の２人，そして事前・事後及び実習の２科目とも 2.5 未満の Z9(2.0,2.0)のの１人，計５人が問題となるが，実習の評価を重視し，評価 A の Z2 と Z7 を除外する。

①Z5 について

GPA 得点で見ると，全科目＝3.2,幼教科目＝3.0,事前・事後＝3.0,実習＝2.0 となっている。実習のみが評価 B のケースである。

１）10 項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価は 10 項目の合計点が 23.6,実習担任評価の合計点は 28.1 で，Z7 と同様に自己評価点が実習担任評価点よりかなり低くなっている。Z7 との相違点は，自己評価合計が 23.6 点で，平均の 29.9 点よりかなり低く，また実習担任評価が実習担任評価点の平均点とほぼ同点になっている２点である。簡潔に表現すれば，他者評価は平均並みだが，自己評価が低いということになる。

２）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「余裕をもった出勤ができていた。」，基礎技能については「レパートリーが数種類あり，短時間ですぐに活用することができていた。」，あるいは担任からの「アドバイスを受け，それを生かしながら半日保育に取組んでいた。」などの肯定的に評価する記述がみられる。

総合所見には，「子ども達に対する接し方，かかわり方がとても穏やかで優しくて好感がもてました。半日保育でも指導案の書き直しなどで大変でしたが，パートナーの教生と協力し，また他の教生からのアドバイスも受けながらやり遂げることができました。」と記載されている。

10 項目についての実習担任評価合計は平均点に近いが，自己評価はかなり厳しい。勤務態度，教生との協力，子どもとの関係づくりでの対応や他者との関係形成には自信があるが，具体的課題場面での対応に，他者が考える以上に不安感をもっている可能性がある。具体的体験の積み重ねが必要と思われる。

②Z8 について

GPA 得点でみると，全科目＝3.0，幼教科目＝2.8，事前・事後＝2.5，実習＝2.0 となっている。Z5 と同様に実習のみが評価 B のケースである。Z5 との相違点は，全科目，幼教科目，事前・事後共に Z5 より得点が低いという点である。

1）10 項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価は 10 項目の合計点が 23.9，実習担任評価の合計点は 16.0 となっており，自己評価も 29 人中で最も低いレベルに属しているが，実習担任評価点はさらに低くて，29 人中最下位となっている。ねらい・内容設定以外の全ての項目で，実習担任の評価が低い。自他評価ともに低いと言える。

2）実習担任のコメント

実習担任の総合所見として，「自分が（保育で）こうしたいという思いを他の実習生に伝えることが難しかったようであるし，アドバイスを前向きにとらえることができなかった。」という記述がある。

目的意識や実習に取り組む意欲，同じクラスに配属された教生との関係づくり，本人のコミュニケーション能力など，複数の問題が絡んでいる可能性がある。使命感・責任感のみが自己評価と実習担任評価共に 3.0 点を得ているにもかかわらず，具体的場面での問題解決力に弱さがあり，その点を指導する必要があるのかもしれない。

③Z9 について

GPA 得点でみると，全科目＝2.7，幼教科目＝2.9，事前・事後＝2.2，実習＝2.0 となっている。事前・事後と実習が評価 B レベルのケースである。Z5 と Z8 との相違点は，全科目と事前・事後の得点が低いという点である。

1）10 項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価は 10 項目の自己評価の合計点が 24.9，実習担任評価の合計点は 23.5 となっており，自己評価と実習担任評価共に 29 人中の下位１／３に含まれる。また自己評価と実習担任評価の格差は小さい。自他評価ともに低い。

2）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「遅刻はないが遅い。」，「協議会の中では意見は聞かれませんでしたが，記録の中で個人のみとりは深まっていると感じた。」，「担任との意思疎通が難しかった。」などと記述されている。

実習担任の総合所見として，「思いは深いように思うのですが，なかなかその思いを引き出せませんでした。実習生同士でも思いを伝えることが少なかったようです。ショート保育では下書きは出しましたが，清書は提出しませんでした。半日保育も約５回の書き直しを頑張ったが，やっと当日の朝仕上げることができました。」と指摘されている。

自他評価の低さが関係しているのか，目的意識的に実習に取組む意欲の低さ，同じクラスに配属された教生との関係づくりでも，コミュニケーション力の問題も絡んでいるのか積極的になれない姿がある。実習担任の指導に対応しようとするが，自分のつもりと問題処理作業との間でズレが生じ，ジレンマを抱えているようにも思われる。指導す

る場合に細やかな配慮を要するケースである。

（2）A0入試グループのケース分析

このグループでとりあげるのは，事前・事後と実習の2科目でGPA得点が2.5未満のA1(2.0,2.0)とA9(2.0,2.0)の2人，事前・事後と実習に幼教教科を加えた3科目で2.5未満のA3(1.0,1.0,2.1),A4(2.0,2.0,2.3)，A6(1.5,2.0, 2.1)の3人，計5人である。

①A1について

GPA得点でみると，全科目=3.0，幼教科目=3.3，事前・事後=2.0，実習=2.0となっている。実習関係のみが評価Bのタイプである。

1)10項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が31.7，実習担任評価の合計点は22.3となっており，自己評価点は29名の平均点を超えているが，実習担任評価点はかなり低い。10項目中，指導案づくりの1項目で実習担任評価点の方が自己評価点を上回るのみで，実習担任評価点の22.3は29名中で最も低いレベルに含まれる。象徴的なのは，勤務態度と担任からのアドバイス対応で自己評価は非常に高い（3.5,4.0）が，実習担任評価の評価は非常に低い（1.3,1.5)。自己評価は高いが，他者評価は逆に低いケースと言える。

1）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「自分の思いを伝えようとするとき言葉足らず。」,「連絡なしに欠席する。」,「照れがあるのか，子どもとの共感的対応にまでいたらない。」,「自分の考えを通そうとする場面が多く見られた。」など，自己表現力の低さと身勝手と受けとられがちな面が指摘されている。他方で，「前日の遊びの中で気になる子を次の日に観察したり，援助したりしていた。」,「音楽あそびに興味を持ち，ショートや半日保育ともに音楽にかかわる遊びの保育をした。」などの積極的な一面も指摘されている。

総合所見の中で，「言葉足らずで誤解されることがある。」,「体調管理の不十分さ」,「得意分野以外のことに挑戦する意欲が見られなかったのは残念。」などといった点が指摘されている。

自尊心の高さが関係しているのか，自信のもてない場面や対人関係に自己中心的な対応が見られるが，得意場面では積極的な姿勢を示せている。この後者のプラス面を大事にしながら，自己表現力や仕事に対する責任ある行動のとり方，自意識と現実的対応力のギャップの解消などに自覚的に取組めるように援助することが課題と思われる。

②A9について

GPA得点でみると，全教科＝2.8，幼教科目＝2.7，事前・事後＝2.0，実習＝2.0となっている。事前・事後と実習関係が評価Bのタイプである。全科目と幼教科目の得点はほぼ平均点に近い。

1）10項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が20.8，実習担任評価の合計点は25.1となっており，自己評価点は29名の平均点を大きく下回り，実習担任評価点も平均点より低い。自己評価点で特に低いのは指導案づくり（1.5）と使命感・責任感(1.0)である。実習担任評価で1.0台はなく，使命感・責任感は3.3となっている。他者評価は普通だが，それ以上に自己評

価が低く，背景に具体的な指導面での力量不足が関係していると思われるケースである。

2）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「実習中に2日間，胃が痛い」と担任に訴えている。園内の整理整頓で「これでいいのかを担任に確認する場面が多く見られた」ことも記されている。また，「ショート保育で，『うまくできそうにないから別のものにかえていいですか』との質問もしている。」という指摘もある。

総合所見の中で，「とても繊細な感じがした。『失敗したらどうしよう』など，失敗という言葉が協議会の中でよく聞かれました。失敗も財産と励ましてきました。」と記述されている。

失敗することに対する不安が強く，仕事への使命感・責任感が強いだけに，具体的作業場面での精神的緊張感が高まっている可能性がある。そのため勤務や教生に対しても積極的にかかわれなくなっているのではなかろうか。ちょっと難しい課題へのチャレンジをして小さな達成感を体験しつつ自信をつけ，小さな失敗を自分で受け止め，次につなげる姿勢を引き出せるよう援助することが課題と思われる。

③A3 について

GPA 得点でみると，全科目＝2.2，幼教科目＝2.1，事前・事後＝1.0，実習＝1.0 となっている。全科目，幼教科目も評価 B が多く，事前・事後と実習関係が評価 C のタイプである。全科目と幼教科目共に評価が低く，実習関係も評価が低い。専門知識，実践力共に評価が低いケースである。

1）10 項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が 25.8，実習担任評価の合計点は 22.5 となっており，自己評価は 29 名の平均点を下回り，実習担任評価も最低レベルに入る。自己評価で 3.0 以上は，基礎技能(3.3)と担任からのアドバイス対応(3.0)のみである。他者評価より自己評価は高いが，その高い自己評価は自分の得意技能に対する自信と担任から学ぶ姿勢への評価が支えている。

2）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「遅刻1回，出勤時刻も他の教生に比べると遅かった。」，「毎日疲れた表情で出勤してきたことが少し気になった。」と記述されている。しかし，「疑問に思うことを他の教生に聞いたりして解決しようと努力していた。」こと，「日数がたつにつれ，子どもたちと笑顔でかかわることができるようになった。」などの積極面も観察されており，「ピアノの技能は素晴らしかった。」ことも指摘されている。

総合所見の中で，「実習当初は笑顔も少なく心配でしたが，慣れてくるにつれて子どもたちとのかかわりもうまくいくようになり，笑顔が見られるようになりました。ピアノがとても得意で，子どもたちのリクエストにもすぐ応えられたので，自信をもてたのではないかと思いました。」と指摘されている。

初期段階で，附属幼稚園実習についてどのようなイメージと目的意識をもっていたかが問題であろう。実習担任と周囲が A3 に対して気遣い，園環境に慣れることを見守る姿勢を堅持したことが，自分なりの目的意識と周囲との積極的なかかわりを引き出す結

果となっている。得意とするピアノ演奏技能が，子どもとの積極的なかかわりを生む契機となっている。幼児教育に限らず，自分の得意分野（技能を含む）もつ意味を考えさせられるケースである。

④A4について

GPA得点でみると，全科目＝2.7，幼教科目＝2.3，事前・事後＝2.0，実習＝2.0となっている。幼教科目で評価Bが多く，事前・事後と実習関係が評価Bのタイプである。全科目の評価点は平均並みで，幼教科目と実習関係が評価Bレベルのケースである。

1）10項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が30.5，実習担任評価の合計は平均点より低い26.9となっている。自己評価点で実習担任評価点より低かったのは基礎技能のみで，他の9項目は同点又は自己評価点の方が多少上回っている。実習担任評価が，勤務態度，子ども理解，子どもへの直接的援助，ねらい・内容設定，指導案づくり，使命感・責任感の6項目でいずれも2.0台と低いのが特徴である。ほとんどの項目で自己評価が高いが，実践力を中心とした項目に関する他者評価は低いケースである。

1）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「わからないことなどを協議会で出し，解決しようと努力していた。」，「一人で遊んでいる子どもに寄り添い，友達との遊びを楽しむことができるよう，言葉かけをすることができていた。」，「得意のピアノで歌ったり踊ったりする活動を，より楽しいものにすることができていた。」などの積極面が記述されている。「ピアノの技能は素晴らしかった。」とも記されている。

総合所見では，「もう少し積極的に子どもたちとかかわってもいいかなと思いましたが，時間が経つにつれて自分で動けるようになりました。ピアノが上手で，子どもたちの気持ちをうまくひきつけ，音楽って楽しいよと，伝えることができていました。」と指摘されている。

A3との共通点があり，時間経過とともに子どもへのかかわりや積極性が見られるようになっている。問題は専門性としての子ども理解，子どもへの直接的援助，ねらい・内容設定，指導案づくりなどへの評価の低さであろう。ピアノの技能だけでは子どもを一時的に楽しませることはできても，日々の保育の中で，どのような見通しをもって子どもにかかわるか，という点で課題を残している。

⑤A6について

GPA得点でみると，全科目＝2.4，幼教科目＝2.1，事前・事後＝1.5，実習＝2.0となっている。やはり幼教科目で評価Bが多く，事前・事後で評価Cがあり，実習が評価Bのケースである。全科目の評価点は平均並みで，幼教科目と実習関係が評価Bレベルのケースである。全科目と幼教科目共に評価が低く，実習関係も相対的に低い評価である。

1）10項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が33.5，実習担任評価の合計は平均点より低い23.9となっている。自己評価点の方が実習担任評価点より低かったのは基礎技能のみで，他の9項目全てで自己評価点が大きく上回っている。自己評価点では，勤務態度，教生との協力，ねらい・

内容設定，使命感・責任感の４項目が４以上であるが，実習担任評価点が 3.0 以上をつけたのは，基礎技能と担任からのアドバイス対応の２項目のみである。自他評価の格差が非常に大きく，自己評価が過大に評価されているケースと言える。

２）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「礼儀正しい」が「出勤時刻が遅い方」や，「協議会での積極的な発言場面はほとんど見られなかった。」，また「ピアノ演奏は既存の楽譜を子どもたちが歌いやすいように自分でアレンジしていた。」と記述されている。

総合所見の中で，「教育にたずさわりたいという意欲があまり感じられないのが残念である。思いはあるが積極的にそれを伝えようとする場面が見られなかった。」と指摘されている。

過大な自己評価傾向は A3，A4 と共通しているが，時間経過による子どもへのかかわりなどに変化が見られない。教育者への意思の有無以前の問題として，人とかかわることへの興味の希薄さを感じさせる。積極性はピアノ演奏（伴奏）に限られている。

（３）推薦入試グループのケース分析

①S１について

GPA 得点でみると，全科目＝2.9，幼教科目＝2.5，事前・事後＝2.5，実習＝2.0 となっている。Z8 と得点レベルが類似し，実習のみ評価 B のタイプである。

１）10 項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が 23.3，実習担任評価の合計点は 22.1 となっている。自己評価点も 29 人中で最も低いレベルに位置し，実習担任評価点も同様に最下位レベルとなっている。自己評価で 3.0 以上は勤務態度，担任からのアドバイス対応，使命感・責任感の３項目で，実習担任評価はそれより低くなっている。実習担任評価は，子ども理解，子どもへの直接的援助，基礎技能，ねらい・内容設定など，子どもに直接かかわる実践力の評価が 2.0 以下と低い。

２）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「実習生同士，名前で呼び合っている場面も見られた。」，「朝の清掃が機械的。何のためにするかではなく，しなければいけないからそこに居るという感じ。」，一方で「子どもの目線に立てている。」「朝も早くに出勤。」といった面も記されている。

総合所見では，「保育の難しさは感じてもらえたように感じたが，保育ということについて本質のところはなかなか伝えきれなかったように思います。自分の半日保育が終わると保育中も少し気が抜けたような感じに見えました。本人からも協議中に『気が抜けて…』という話がでました。」と指摘されている。

実習に取組む目的意識や意欲の低さを感じさせ，自分の立場と役割を自覚し，周囲とかかわらねばならないかについての認識が不十分と思われる。そのため，活動を表面的かつ義務的にしかとらえきれず，達成感より安堵感の方が優位となる傾向も見られる。幼教科目の GPA 得点 2.5 では専門知識の理解が必ずしも高いとは言えない。子どもや保育に関する基礎的理解をより高め，具体的な課題意識をもたせて今後の活動に取組ませ

ていく必要がある。

②S4について

GPA得点でみると，全科目＝2.9，幼教科目＝3.2，事前・事後＝3.0，実習＝2.0となっている。Z5と得点レベルが類似し，実習のみ評価Bのタイプである。

1）10項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が40.5，実習担任評価の合計点は21.0と約半減するのが特徴である。自己評価点は29人中最高点であるが，実習担任評価点は逆に最下位レベルとなっている。自己評価点は10項目全て3.0以上をつけており，教生との協力，ねらい・内容設定で最高の5.0をつけている。それに対して，実習担任評価はほとんどが3.0以下で，中でも保育者からのアドバイス対応と使命感・責任感の2項目では，それぞれ1.0と1.3ときわめて低い評価をとなっている。

2）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「行動力があり，何事においても積極的に取組もうとする意欲はあるが，確認することなく先走る傾向にある。他者からのアドバイスが次のステップに生かされることがあまりない。」と記されている。

総合所見では，「行動力があり，活発であるが，その一方で，何事においても丁寧さに欠ける。日録は大まかなことの記入がされているが，次の保育に生かすべき課題などを書き入れて反省し，次のステップへ生かす工夫が欲しかった。」と指摘されている。

一見すると目的意識や実習に取組む意欲の高さを感じさせるが，周りからの意見をあまり聞かず，実際はやる気だけで突っ走り，結果への振返りもなく，根拠なしに自分は「全てできている」と主観的に思い込んでいる可能性がある。客観性の欠如の一言につきるのだが，自らの活動に対する自己客観視と内省力，そして他者の意見をふまえて自らの考えや対応を見直そうとする姿勢を引き出す必要があるのではなかろうか。これらの改善点は，子ども理解にも直結する重要な資質・能力でもある。専門科目のGPA得点の高さからみても，何かきっかけがあれば転換への糸口がつかめ，一生懸命さからくる積極性を活かせるのではなかろうか。それがなければ，恐らく傲慢さが強まるだけであろう。自らを振り返ることの重要性を実感させてくれるケースである。

③S5について

GPA得点でみると，全科目＝2.8，幼教科目＝2.6，事前・事後＝3.0，実習＝2.0となっている。S1と類似し，幼教科目が低く実習が評価Bのタイプである。

1）10項目についての自己評価と実習担任評価

自己評価の合計点が29.3，実習担任評価の合計点は23.5となっている。自己評価点は平均レベルだが，実習担任評価点は下位1/3に含まれており低い。自己評価では，子ども理解とねらい・内容設定が，それぞれ1.7，1.0と最も低くなっている。保育者からのアドバイス対応は5.0，勤務態度は4.0と，この2項目が最も高い。実習担任評価は基礎技能を除く項目全てで自己評価より低いが，最も格差が大きいのは，保育者からのアドバイス対応で，2.0となっている。実習担任からの助言に対する対応評価で，学生自身と実習担任との認識のズレが非常に大きく，保育実践力で要となる項目での実習

担任評価が低いケースである。

2）実習担任のコメント

特記事項記載欄には，「出勤時間は毎日決まった時刻で，誰よりも早く保育室に来て清掃等に取組んだ。」「ショート保育では自作の紙芝居を用い，子どもたちを楽しませた。」，その一方で「自分の思いを貫き通す意志の強さがあるが，もう少し柔軟さが欲しい。」，「子どもの実態把握が足りず，保育のねらいを高くもってしまっているところが多くみられた。」といったことも記述されている。

総合所見では，「保育への思いが強く，子どもたちへの要求も高い。日録の記入については丁寧さが欲しかった。周りの意見も取り入れる心のゆとりと柔軟さが欲しい。」と指摘されている。

勤務態度や実習に取組む意欲は比較的高い。但し，自分のつもりを通そうとするこだわりが強く，結果的に子どもへの要求が一方的なものになっていると考えられる。実際は，子ども理解に基づく適切なねらい・内容設定ができていないことを自覚できていると思われる。担任のアドバイスに対する非常に高い自己評価は，自分の子ども理解の曖昧さを自覚しているが故に，実習担任から有効な情報を得たい思う気持ちがそのまま評価に出ているように思われる。ただ，思い込みの強い，自分のつもりを正当化できる理由づけを得たい気持ちも，一方で働いている可能性もある。その両方の期待が自己評価における唯一の 5.0 に示されているのではなかろうか。多くの教師が最初に悩む姿はこんなものかもしれない。体験と良きアドバイザーが必要と思われる。

6　おわりに

コースの独自性の一つであるピアノ技能（伴奏）の３年次の到達度をはじめ，入試選抜方法別にみた履修科目の GPA 得点の比較，実習関連科目の GPA 得点の低い学生を中心に附幼実習評価との関連性についてケース分析をした。

実習担任の５段階評価によれば，幼稚園で必要なピアノ伴奏力のレベルが 1.0 で不十分と評価された学生が，こども保育専攻には約 2.5 割にあたる５人もいることが判明した。この点に関しては，芸術的感性開発専攻の学生は，全体平均点 2.9 を上回る学生が 10 名中９名を占めており，AO 入試という「入口」で一定水準の基礎技能を有する学生を確保できている。こども保育専攻の５人については，学生自身の自己努力も問われるが，芸術的感性開発専攻を立ち上げた意義を含めて，指導する側にも問題はないのかを検討すべきではなかろうか。

入試選抜方法別にみた履修科目の GPA 得点では全科目と幼教科目では３グループとも 2.5 から 3.0 の範囲に収まる似通ったパタンであったが，科目間の点数変動が小さく，全科目で比較的安定した成績をとった学生が最も多かったのは前期入試グループであった。AO 入試グループは個人間の変動が大きく，幼教科目，事前・事後科目，実習の３科目 GPA 得点が共に低い学生も複数存在していた。推薦入試グループは，実習を除いた授業科目の GPA 得点が最も高い得点を示したが，実習で急落する傾向を示した。実習関

連科目（事前・事後，実習）でAO入試グループは2.5以下に低下し，推薦入試グループも実習のみで2.5を割る傾向がある。実践力との関係で重要なことであり，これがどういう意味をもつのかを個別に考察するために，附幼実習における実習評価点の低いケースを分析した。

実習関連科目（事前・事後，実習）のGPA得点を基準に，得点の低い学生を問題ケースとして抽出し，実習の自己・担任評価とを関連させて分析した。前期入試グループから３人，AO入試グループから５人，推薦入試グループから３人の計11人であった。推薦入試グループが最も多くて４人中３人（約８割），次に多かったのがAO入試グループで10人中５人（５割）を占めていた。個別ケース分析では，実習評価項目に関する自他評価の不一致点もいくつか見出され，実習担任の特記事項，総合所見などでの記述内容から，個々の学生が抱える具体的課題を検討することができた。

参考資料

（１）中央教育審議会（2008）「学士課程教育の構築に向けて」文部科学省

（２）八田昭平，進野智子，松浦勳（1978）「幼稚園教員養成課程の現状と展望」未刊行報告書

（３）長崎大学教育学部学務（2011）「20年度入学者GPAデータ」教育学部学務資料

（４）長崎大学教育学部（2011）「平成23年度学生便覧」長崎大学教育学部

（５）調査研究協力者会議（2002）「幼稚園教員の資質向上のために」文部科学省